

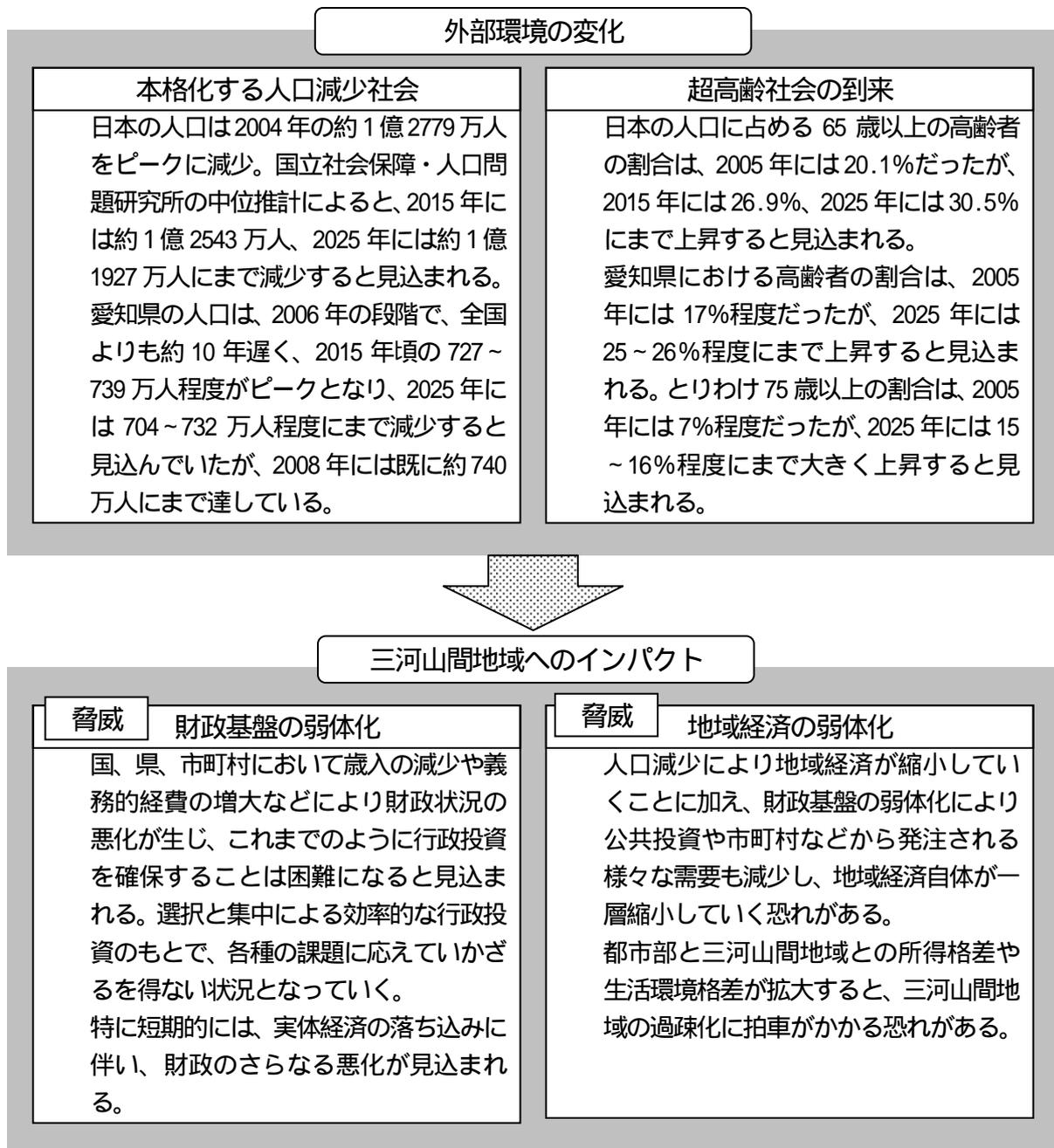
# 2

## 三河山間地域の状況分析

### 2-1 外部環境の変化が三河山間地域に与えるインパクト

今後の地域づくりの方向性を探るため、時代の潮流などの外部環境の変化が三河山間地域にどのような影響を与えるのか、「機会」と「脅威」に分けて整理した。

#### (1) 人口減少・超高齢社会の到来による地域経済の弱体化



## (2) 高速交通網の整備による交流圏域の拡大

### 外部環境の変化

#### 進展する高速交通網の整備

##### 〔新東名高速道路〕

三河山間地域には、額田ＩＣと新城ＩＣが設置される。

両インターを含む豊田東ＪＣＴ～引佐ＪＣＴ（静岡県）は2014年度に供用開始予定。引佐ＪＣＴ～御殿場ＪＣＴ（静岡県）は一足早い2012年度に供用開始予定。

##### 〔三遠南信自動車道〕

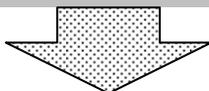
三河山間地域には、鳳来ＩＣと東栄ＩＣが設置される。

最重要整備区間として鳳来ＩＣ～引佐ＪＣＴの早期完成を目指し、トンネルや橋梁の工事が進められている。東栄ＩＣ～鳳来ＩＣでは設計等調査中、佐久間ＩＣ～東栄ＩＣでは用地買収及び一部工事中。

##### 〔リニア中央新幹線〕

首都圏～中京圏間については、ＪＲ東海が2025年までの営業運転の開始をめざしている。

ＩＣ名・ＪＣＴ名は仮称



### 三河山間地域へのインパクト

#### 機会

#### 交流圏域の拡大

高速交通網の整備による時間短縮や定時性確保の効果は、生活圏・通勤圏を拡大させ、生活環境や定住条件を向上させるほか、観光交流圏の拡大や物流環境の向上により、新たな産業誘導の契機ともなっていく可能性がある。

しかし、これらの高速交通網は三河山間地域の縁辺部に位置するため、三河山間地域全域に時間短縮などの効果を拡大し、地域の生活の向上に実感が持てるようにするためには、現道の整備水準を併せて向上させることが必要となっている。

#### 脅威

#### ストロー効果の恐れ

高速交通網の整備により消費活動が域外に流出し、地域内における商業活動が困難となる恐れがある。また、既存の幹線道路の通行量を減少させ、現在立地している沿道サービス型の商業施設の利用者を減少させる恐れもある。

就労者が域外に流出しやすくなるため、地域内において就労者を確保しづらくなる恐れがある。

#### 脅威

#### 地域間競争の激化

高速交通網は、近隣県にも整備され、高速交通網を生かした企業誘致や観光客誘致、さらには移住者確保の取組を近隣県でも強化していることから、地域間競争の激化が見込まれる。

### (3) 価値観の変化・多様化による関心の高まり

#### 外部環境の変化

##### 社会貢献意識の向上

心の豊かさや生活の質の向上が重視される傾向が強まる中、生きがいや自己実現など精神的な満足を求め、NPOなどで自発的に地域貢献活動をしたいと考える人が増加している。  
団塊世代(1947~49年生まれ)が定年退職する時代を迎える中、こうした動きはさらに拡大すると見込まれる。

##### 環境意識の向上

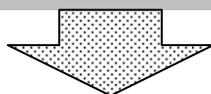
地球環境問題の深刻さが広く認識され、持続可能性という考え方が社会に浸透してきている。  
地球温暖化防止や循環型社会の構築、自然環境の保全、生物多様性などに対する関心や参画意識が高まっており、今後もさらに広がっていくと見込まれる。  
「あいち森と緑づくり税」を導入し、森林などを県民全体で守り育てていく仕組みづくりが行われている。

##### ライフスタイルの多様化

価値観の多様化に伴い、多様なライフスタイルの選択が可能になってきており、情報通信技術を活用した在宅勤務などの働き方や、都市住民が農山漁村に移住する動きなどがみられる。さらに、複数の生活拠点を同時に持つ「二地域居住」の動きも出てきている。  
ゆとりや癒し、安心・安全に対するニーズは拡大しており、こうした動きは今後さらに拡大していくと見込まれる。

##### 観光スタイルの変化

観光スタイルが、「通過型」・「団体型」の物見遊山的な旅行から、訪れる地域の自然や生活文化、人とのふれあいを求める「体験型」・「交流型」・「個人型」の旅行へと転換するなど、旅行者のニーズやスタイルは多様化しており、団塊世代の定年退職により、この規模が拡大していくと見込まれる。



#### 三河山間地域へのインパクト

機会

##### 交流居住の拡大

ゆとりや癒しに対するニーズの拡大やライフスタイルの多様化などを背景に農山村に対する関心が高まり、団塊の世代を中心に都市住民による観光交流の活性化や移住希望者が拡大していく可能性がある。

機会

##### 社会貢献活動の活性化

環境や農山村に対する関心の高まりにより、三河山間地域において、都市住民による地域貢献活動や企業のCSR活動(社会的責任に関する活動)が拡大していく可能性がある。

## (4) 情報通信社会・グローバル社会によるマーケット拡大

### 外部環境の変化

#### 情報通信社会の深化

情報通信技術の飛躍的な発達、日常生活やコミュニケーションのあり方に大きな変化をもたらしている。インターネットを通じた高度な情報へのアクセスや多様な商品・サービスの入手はもとより、ブログなどによる情報発信や一人ひとりの知や力を結集し、協働していくことも可能となってきた。

今後も、こうした動きの拡大や、遠隔地医療、遠隔地教育の充実など、日常生活や企業活動に高度な情報通信技術が浸透していくことが見込まれる。また、情報通信技術を活用した在宅勤務なども拡大が見込まれる。

#### グローバル化の進展

経済のグローバル化の進展、東アジア各地域の急速な経済成長と産業構造高度化の中で、東アジア規模での生産ネットワークの構築や経済連携の動きが活発化している。

#### アジアにおける観光ビックバン

世界観光機関(WTO)の長期予測によると、1995年に全世界で約5.9億人であった国際観光客は、2020年には15.6億人に達すると見込まれる。

特に東アジア・太平洋地域においては、1995年に約8千万人であった国際観光客が2020年には約5倍の4億人へと急速に増加すると見込まれる。

### 三河山間地域へのインパクト

#### 機会

#### インターネットによる販路拡大

インターネットの活用により、三河山間地域に立地したまま販路を拡大したり、これまでの形態では取り込むことが困難であった小規模で多様な需要が市場として成立したりするなど、新たなビジネスチャンスが広がる可能性がある。

#### 機会

#### 農産物の輸出拡大

急速な経済成長を遂げている東アジア各地域が、高品質の農産物などの輸出先となる可能性がある。

#### 機会

#### アジアからの観光客増大

国際観光客の増大が見込まれる中、中長期的には、名古屋市など近隣都市を訪問する訪日外国人や東京～大阪間などをツアーで移動する訪日外国人の一部を、新東名高速道路や三遠南信自動車道等を経由して、三河山間地域においても受け入れられる可能性がある。

#### 脅威

#### 地域間競争の激化

企業は、研究開発、製造、販売などの企業活動の拠点を世界的な視点から検討し、最適な立地や企業間ネットワーク構築などをめざしており、企業誘致などの地域間競争が、国内だけでなく、BRICs(ブラジル・ロシア・インド・中国)などの新興国や、目覚ましい成長を遂げている東アジアの国々との間でも繰り広げられることとなる。

## 2-2 三河山間地域の特性

今後の地域づくりの方向性を探るため、三河山間地域がどのような「強み」を持っているのか、あるいは、どのような「弱み」を持っているのか整理した。

### (1) 三河山間地域が持つ“強み”

強み

都市地域との近接性

三河山間地域の最大の強みは都市との近接性であり、この強みを地域づくりに生かさないか様々な観点から確認することが必要である。

#### 周辺部に 900 万人が居住

三河山間地域の人口は約 12 万人だが、周辺は名古屋市、旧豊田市、豊橋市、旧岡崎市など本県の都市地域や、浜松市、飯田市、中津川市など隣接県の都市地域に囲まれており、周辺人口は 900 万人にも達している。

都市に近接しているという特性は、観光客の誘致や特産品の販売などに極めて有利な条件を持っているといえる。

#### 高度な都市機能の活用

三河山間地域においては、大学や高度な医療機関、質の高い文化施設などが不足しているが、こうした都市機能が集積した大都市が近隣にあることから、これらの高度な都市機能を比較的容易に活用することができる。

例えば、三河山間地域の地域づくりに大学やシンクタンクが持つ知識などを導入しやすい環境となっている。

#### 都市と比較して安価な土地

都市地域と比較すると安価な土地となっている。

例えば、愛知県企業庁による工業用地の分譲価格で見ると、新城市や岡崎市額田地区の工業用地は、1㎡あたり 21,000 円～27,000 円程度となっており、豊橋市の 31,000 円～39,000 円程度などと比べ、安価となっている。

#### 近隣都市に居住する多くの地域内出身者

近隣の都市地域に多くの地域内出身者が居住している。

三河山間地域に居住する高齢者の子供たちが近隣の都市地域に居住していることは、集落の維持などを考える際に、注目すべき点だと考えられる。

強み

特色ある農林水産業・都市では味わえない地域資源

三河山間地域には、日本の原風景ともいべき地域資源がいくつも存在している。これらは、観光の対象や特産品の材料となるだけでなく、三河山間地域のイメージづくりやブランドづくりの点でも大切な素材となる。

農林水産物

- ・夏季冷涼な気候を生かして生産される農産物  
(ミネアサヒ(米)・夏秋トマト、イチゴ、シクラメン、茶など)
- ・豊富な森林資源・酪農・内水面漁業(アユ・マス) など

自然・景観

- ・茶臼山高原 芝桜の丘
- ・ブルーベリーの里
- ・くらがり溪谷・鳥川ホテルの里
- ・棚田百選「四谷千枚田」
- ・香嵐溪
- ・四季桜
- ・樹氷・湧水・星空 など

歴史・文化

- ・重要無形民俗文化財「花祭」「三河田楽」
- ・開山1300年「鳳来寺山」
- ・長篠の戦い・設楽原古戦場
- ・中馬のおひなさん・たんころりん
- ・小原和紙
- ・チェンソーアート
- ・ランプシェード など

田舎暮らし体験・手づくり体験

- ・千万町茅葺屋敷
- ・手作り工房山遊里・香恋の館
- ・旭高原元気村
- ・稲武どんぐり工房
- ・つくで手作り村
- ・農林漁業体験民宿 など

温泉

- ・湯谷温泉
- ・とうえい温泉
- ・稲武温泉どんぐりの湯
- ・兎鹿嶋温泉 など

強み

三河山間地域を活動の舞台とするNPO等

三河山間地域では、数多くのNPO団体が社会貢献活動を行っている。また、三河山間地域の集落が、都市住民との交流活動を実施するといった取組も行われている。こういった地域づくりの担い手となる主体が存在することは、今後の地域づくりを実践していくうえで、大きなポテンシャルになる。

NPO等の活動例

- ・農山村と都市との協働・共生ネットワークづくり
- ・流域における上下流の交流を図るイベントの実施
- ・流域の市民、企業、行政のパートナーシップのもとでの森づくり活動
- ・森林地域に関する知識及び情報の普及啓発活動
- ・重要無形民俗文化財「花祭」の伝承支援 など

## (2) 三河山間地域が抱える“弱み”

### 深刻な超高齢・過疎社会

弱み

高齢化率は年々高まっており、2007年には26.5%となっている。特に北設楽の3町村は、いずれも高齢化率が40%を超えており、県平均や全国平均と比べ、2倍以上高くなっている。

都市部に隣接した旧藤岡町では大きく人口が増加しているが、その他の地域では人口が減少しているところが多く、過疎化が進んでいる。

こうした状況は、地域社会の維持や伝統ある行祭事の継承を困難にしているほか、交通弱者の増大や労働力の減少といった課題を生み出している。

### 停滞する農林水産業

弱み

農業者の高齢化や過疎化による担い手不足の進行が早く、耕作放棄地が多くなっている。また、深刻な鳥獣被害も生じており、生産意欲の減退などにより、耕作放棄地が一層増加する恐れもある。

森林の手入れが行き届かず、県が毎年の目標としている間伐実施面積は4,800haだが、近年の間伐実施面積は約2,800ha~4,100haにとどまっており、目標面積を大きく下回っている。

こうした耕作放棄地の増加や手入れの行き届かない森林の増加は、県土の保全や水源のかん養といった森林・農地の持つ多面的機能の維持という面でも問題となっている。

### 脆弱な生活基盤

弱み

多くの地域でバスが利用しづらく、高校生の通学や高齢者の通院に支障をきたしている。

道路は狭隘区間も多く、安全上の問題がある。

超高速ブロードバンド接続ができない地域や携帯電話が利用できない地域が散在している。アナログ放送が終了するとテレビが視聴できなくなる地域が生ずる恐れもある。

児童生徒数の減少により、学校の小規模化と、それに伴う統廃合が進んでいる。

### 途切れた地域内経済循環

弱み

生活関連産業の集積が薄く、三河山間地域の住民でも、浜松市や豊橋市、豊田市などの周辺都市で買い物を行う機会が多いなど、消費による経済効果が他地域に流出している。

観光は、宿泊業や飲食業、土産物業など、多くの関連産業に幅広く経済効果を与えるが、こうした観光関連産業の集積も薄く、また、道の駅などでは信州などの特産品も多く見られるなど、観光による経済効果も限定的となっている。

したがって、単純に交流人口を増やすだけでなく、経済効果をいかに地域内で循環させるかといった視点が重要になっている。

## 2-3 地域づくりの基本課題

「2-1 外部環境の変化が三河山間地域に与えるインパクト」で掲げた「機会」・「脅威」と、「2-2 三河山間地域の特性」で掲げた「強み」・「弱み」の分析を踏まえ、下記のとおり、地域づくりの基本課題を整理した。

この基本課題は、「機会」と「強み」を生かしながら産業の活性化を図ることを中心に、「機会」を生かして「弱み」を克服すること、「強み」を生かして「脅威」に対抗すること、「脅威」が「弱み」に拍車をかけることを防ぐことを基本としており、この基本課題を踏まえたうえで、めざすべき将来像を設定していく。

